

## 望まないもの

27歳の娘は結婚して3年目。23歳の息子は社会人1年目。なぜか、二人とも大阪市梅田の半径3km内に職場も住まいもあります。二人はそれを望んで結婚したり就職したりしたわけではありません。「好きなことをやりなさい」と、県外に子供を出した親としては、グローバル社会と言われる現代にあって、(何の因果でこうなったの?)と不思議に思いつつも、この幸運に心から感謝しています。

(二人とも、ただ「幸せ」になってほしい…) 幸せの形は様々ですから、二人が自分で幸せだと感じてくれれば、それでいい。親が望むのはそんなものかなと思っています。

しかし、人間は欲張りです。(そろそろいいんじゃない…) とも思うわけです。二人には決して言いませんが。

しかし、これまた、幸い、私は校長先生。学校にはかわゆくて堪らない孫のような存在が5人います。保育士の妻も、0歳児クラスの副主任なので、30人以上のおチビちゃん達に囲まれています。(可愛いやろ?と写真をよく見せられます。)

前置きが長くなりましたが、保護者の皆様におかれましては学校に預けていらっしゃる子供さんに対して、(学校では、とにかく楽しく過ごしてほしい…)を最も望んでおられることと思います。そして、逆に(学校では、いじめや大きな怪我には絶対遭わないでほしい)と強く願っておられると思います。

学校運営者として、私は、『人権教育』と『特別支援教育』の充実を第1目標として掲げています。孫のように愛しい子供達同士が、いじめなどで傷付け合うのは、望まないものの筆頭と考えています。なぜなら、子供本人をはじめ、私以上に子供を愛しいと思っておられる家族の方々を悲しませたくないからです。



【生活科の学習の様子】

しかし、現実には時に理不尽、時に残酷な姿を現します。私は幼い頃、以下の疑問をずっと抱き続けていました。自分の周りで、結構ひどい状況が見られたからです。

「どうして世の中から犯罪はなくなるんだろう。」

「どうして人間は戦争をするのだろう。」

「どうして人はいじめをするのだろう。」

なぜか、答えを親や先生、友だちに尋ねることはありませんでした。(自分で考えて見つけようとしていたのか? 答えが分からないので、いつまでも悶々と考えてばかりいたのか?)

今の子供たちは、疑問に思ったり、人に相談したりすることがあるのでしょうか。今度、聞いてみようと思います。素直で優しい子が多い椎葉小の子供たちにはピンとこないかな?

## いじめをしない子供を育てる

学校現場では、「いじめを見逃さない(認知する)」という姿勢が広がりつつある中で、次の段階の取組として、いじめの問題を「いじめられる子供を守る」という視点にとどまらず、「いじめをしない子供を育てる」という視点から捉え直し、そのための方向性を探ることが喫緊の課題となっています。

「児童がいじめに向かわない態度・能力を身に付けるためにどう働き掛けるか」「いじめを生まない、許さない環境づくりをどう進めるか」ということが問われているのです。その問いに答えるためには、いじめが生じる構造といじめの加害者の心理を明らかにした上で、事後指導にとどまらず未然防止につ

ながる加害者への指導・支援の具体化を図ること、そして、すべての児童が人権意識を高め、共生社会の一員として市民性を身に付けるような働き掛けを日常の教育活動を通じて行うことが求められると考えています。

## いじめが発生する構造

例えば、担任による管理統制が強くなり、教室を一元的な空気が支配するような学級で、「てきぱきと行動し、整理整頓を心がける」という学級目標が立てられたときに、その目標に沿った行動ができない児童に対して、担任が「ぐずぐずしない」「いつも散らかしてばかりいて」「あなたのせいで皆が迷惑している」などと叱責する言動を続けられれば、「違反に対する制裁」を加えるという意識のもとで、その児童の特性につけこむようないじめが起りやすくなります。

また一方で、和気あいあいとした明るいクラスと見えても、担任と児童がなれ合い関係にある場合には、いじめが生じやすくなります。困ったときには何とかしてくれるという信頼感が持てない先生だと担任が認識されると、いざというときに当てにされず、「先生に相談しても無駄だ」という意識が生まれ、問題が水面下で広がっていきかねません。

いじめの解決のポイントは、「傍観者」の中から勇気をふるっていじめを告発する「仲裁者」や「相談者」が現れるか否かにあると言われます。そのためには、担任がいじめられる側を「絶対を守る」という意思を示し、根気強く放課後や休み時間の安全を確保する取組を行うなどして、担任への信頼感と学級への安心感を育み、学級全体にいじめを許容しない雰囲気が高まるように働き掛けることが重要となります。

特に、最近の子供たちは、他者の評価を行動基準とする「他者指向的タイプ」が多く、周囲に過剰に同調する傾向が強いと言われます。そこに被害回避感情が重なると「仲裁者」になることはますます難しくなります。担任が信頼される大人として児童の傍らにいないことによってはいじめて、「相談者」が出現するようになると認識しておくべきと考えます。

## 加害者の心理といじめを生まない環境づくり

いじめの衝動が生じる原因としては、以下が挙げられます。

- ①心理的ストレス(弱者攻撃で解消しようとする)
- ②集団内の異質な者への嫌悪感情
- ③ねたみや嫉妬感情
- ④遊び感覚やふざけ意識
- ⑤金銭などを得たいという利得意識
- ⑥被害者となることへの回避感情

加害者の心の深層には、不安や葛藤、劣等感、欲求不満などが潜んでいることが多いと言われます。

そして、いじめを生まない環境づくりとして、私たちが努めていくべきことは以下の5点と考えています。

- ①異質な要素を受け入れ、多様性を重視する。
- ②人物の評価は多角的かつ長期的に行う。
- ③自己肯定感(有用感)を醸成する。
- ④緊密過ぎない、緩やかなつながりを維持する。
- ⑤問題は早期に開示させ、早期に介入する。(適切な援助希求「SOSを出す」を促す)

子供たちや社会の幸せを求め、学校・家庭・地域は「人づくり」を行う協働体です。2学期もよろしくお願いいたします。



【の、まど／自分だけの  
答え(表現)を求めて】